

もし楽と小咲が結ばれたら。

okapi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ニセコイ」でもし、楽が千棘ではなく小咲を選んでいたら・・・。

原作から分岐のifのお話。

目次

第一章「コクハク」	1
第一章「コクハク」	12
第二章「コンヤク」	25

第一章「コクハク」

―天駒高原―

思い出の絵本の最後のページを見つけた時、私は10年前に起きたことの全てを思い出した。

それはとても短い間だったけど、楽しくて、嬉しくて、でも今になってみると切なくて、

そんな記憶だった。

そっか、私全部思い出した…

本当にみんなとここで過ごしてたんだね

そして一条くんは10年前の約束の男の子…

千棘ちゃんは、10年前も今も私たちのために…

そんなことも忘れて、私…

「ごめんね、本当にごめんね。」

思わず言葉に出してた。

この時の感情はとても整理できるものではないけれど、一条くんが約束の男の子だとわかった

安心感や嬉しい気持ちがないといったら嘘になるかもしれない。

でも千棘ちゃんのことを想うと、胸が苦しくなっただ涙を我慢できずにはいられなかった。

このままじゃ終われない。

もう一度あつて話さないと…!

誰か1人だけが傷ついてお別れなんて絶対に嫌だ!

そう思っただ私は走り出した。

馬鹿だなあ私。るりちゃんに怒られちゃうかな。

でも放つてはおけないよ。
こういうところ、ずっと一条くんを見てきたからかな。

でもどこにいるんだろう、千棘ちゃん。

一条くんなら、場所がわかったりするのかな。ずっと一緒にいるもんね。

そしたらもう2人は再会してるかも。

悶々と考え事をしていて、

さつきまでいたお屋敷を出たところで上空をへりが通った。
と思ったら、中から梯子が出てきて誰かが降りてくる。

あれは…

「万里花ちゃん!？」

驚いて降りてくるその人、橘万里花に向かって叫ぶ。

万里花ちゃんは綺麗に地面に降り立つと、私に声をかけた。

「お久しぶりですわね、小野寺さん。」

「う、うん。久しぶり。」

「って、万里花ちゃんどうしてここに!？」

「身体は大丈夫なの？」

「まあ色々ありましてね。安心してください、用が済んだらすぐアメリカに戻ります。」

「ところで小野寺さんこそ、こんなところで1人で何をしてるんですか？」

「私はさつき一条くんと別れて千棘ちゃんを探してたの。そしたらこのお屋敷を見つけて。」

「なるほどそう言うことですか。」

「その慌てた様子、それにこの屋敷…。もしかして小野寺さんも10年前のことを

思い出したんじやありませんか?」

どきつとした。

やっぱり万里花ちゃん鋭い。

「うん。全部思い出した。」

「みんなここで過ごした時間も、約束のことも。」

「それではついに覚悟を決めたんですね。」

「えっ、ついにつて…」

「何を言っているんですか?ずっと好きだった楽様に告白なさるのでしょう?」

「え!えええ!」

「私が一条くんのことその、好きなこと…知ってたの??」

「あら、むしろあれでバレていないと思っていたんですね…」

衝撃が走る。そんなに分かりやすかったんだらうか私。

「そんな…、じゃあもしかして一条くんも知ってたり…??」

「もしそうだとしたら私…どうしたらいいのー!!?」

てんやわんやな私の様子を面白く思ったのか、万里花ちゃんはクスツと笑った。

「安心してくださいな。どうやら私達の周りには感が鈍い人が多いようですので。」

「楽様もその1人ですわ。それにあなたも…」

「え?」

「いいえ。なんでもありませんわ。」

最後の方は声が小さくて聞き取れなかったけど、万里花ちゃんははぐらかすように話を続ける。

「実はさっき楽様にお会いしましたわ。上空から桐崎さんを見かけまして、

その場所をお伝えしました。」

「今はあの丘の上に向かっていているはずですよ。」

そう言っ指差した場所は、ここからそう遠くはなさそうだ。

一条くんがどこにいるかわからないけど、今から行けば合流できるかもしれない。

「万理花ちゃんありがとう！すぐ向かわなきゃ！」

場所を聞いた私はお礼を言っすぐに目的地へと向かおうと身体をそちらに向ける。

「お待ちください。小野寺さん。」

「ひゃっ、何？万理花ちゃん。」

勢いを殺されたためか、間の抜けた返事をしてしまった。

「あの。私が言うのもなんですが、小野寺さんが楽様を慕う気持ちも本物だと感じました。」

「あなたにはお世話になりましたし、まあせいぜい頑張ってくださいな。」

万理花ちゃんは横を向きながらそう言う。

もちろん私が一番楽様を慕っておりますが。と素早く付け足した

万理花ちゃんの横顔は、

なんだかほんのり赤くなっているようにも見えた。

「ありがとう…私頑張るよ！」

いつも明るくて積極的な万理花ちゃんに私は憧れを抱いていた。そんな人から応援をもらえたことが、素直にとても嬉しい。

「じゃあ今度こそ、いくね。」

そう言っついでいよいよ私は教えてもらった丘の上へと駆け出す。

ともあれまずは千棘ちゃんを見つけないと。

「やれやれ、私ったら本当に何をしているんでしょう。我ながらとんだお人好しですわね。」

「さて、今回は楽様も覚悟を決めてここにきたご様子でしたし、私も結末を見守らないといけませんわね。」

万理花ちゃんと別れてしばらく走っていると、大きな岩が見えてきた。

私は動かし続けていた足をとめる。

あの岩には見覚えがある。そう、私たちが約束をしたあの場所だ。確か岩の裏側に2人で名前を書いたんだっけ。

でも思い出に浸っている時間はすぐに終わった。

そのすぐ近くで、真剣な様子で話す一条くと千棘ちゃんの姿が見えたから。

2人の顔はよく見えなかったけど、2人は向かい合って手を握っていたから。

一瞬思考が止まって、すぐにいろんな感情が溢れてきた。

さつきまでの嬉しい気持ちも塗り替えられてしまうほどに。

一条くんがもしかして私のことをなんて、勝手に舞い上がって期待してしまった自分が恥ずかしい。

「そっか、一条くんは千棘ちゃんのことを…」

今にも壊れそうな心をごまかそうとしてポツリと出た言葉が、余計に私を苦しめる。

泣いちやダメ、祝福してあげなきゃ。

でも。

やだ。少なくとも今は。

そんなの無理だよ。

ごめんね一条くん。千棘ちゃん。

これ以上ここにいたくなくて、気づいたら私は来た道をまた走っていた。

いつもだったらすぐにバテてしまうだろう。そんなこと気にならないくらい、とにかくがむしやらに。

—————

あれからどれくらい経っただろう。1時間いや2時間くらいかな。

私はまたあのお屋敷に戻って、部屋の隅でうずくまっていた。

今の私はきつとひどい顔をしていると思う。こんな姿を見たら一条くんはどう思うかな。

優しいからきつと心配してくれるだろうな。

「せめて想いを伝えたかったなあ。」

どうしようもなく彼のことが好きなのがわかったけれど、今さらどうしようもない。

早くみんなのところに戻らないと。なんて言い訳しよう。

でも戻ったら一条くんと千棘ちゃんもいる。幸せな2人を見るのも辛い。

そんな風にしばらく塞ぎ込んでいたら、その暗い殻を破るかのよう
に私を呼ぶ声が聞こえた。

「おーい、おのでら———！」

「どこだ———！」

聞き間違えるはずもない。大好きな彼の声だ。

「一条くん…」

やっぱり探しにきてくれたんだ。でも今は。

それからすぐに私のいる部屋の扉が勢いよく開いた。

「小野寺!?ここにいたのか…」

「よかった…。大丈夫か小野寺。」

息を切らして大量の汗を流しながら一条くんは私に優しい声をかけてくれる。

「どうしたんだよ。どこにもいないから心配したぞ。」

「あはは、実は気がついたらここで寝ちやってたみたいで。」

優しい彼をこれ以上心配させたくなくて、嘘をついた。だけど。

「小野寺?さすがにそれは、誰でも嘘だつて気づくと思うぞ。」

「本当に何があったんだ。その、俺で良ければ話してくれないか?」

もつと嘘がうまければいいのに。この時初めてそう思った。

でももしかしたら、気づいて欲しかったのかな。

「さつきね、私見ちやったの。一条くんが千棘ちゃんに告白するところ。」

「え、それって。小野寺まつ」

「それでね私!本当に今こんなこと言うのは迷惑だつてわかってるんだけど、聞いてほしいことがあるんだ。」

一条くんが何か言いかけたけど、私はそれを遮った。

気持ちを伝える最後のチャンスだと思ったから。

そんないつにない私の真剣さに驚いたのか、一条くんは静かにうな

ずいてくれた。

「私……。ずっとずっと一条くんに言えなかった事がある。」

「何度も何度も言おうとして、その度に上手く言えなくて……」

「それに初めて気づいたのは中学生の頃だったの。私にとっては二度目の、でも本当は初めてのの。」

「私が好きになった人……」

一条くんが驚いた顔をしてる。

がんばれ。あと少しだ私。

深呼吸をして、一条くんの目を真っ直ぐ見る。

「一条くん。私、一条くんが好きです。」

「ずっとずっと、好きでした。」

「こんな時にごめんね。」

悲しい気持ちを隠すように、精一杯の微笑みで彼に想いを伝えた。何秒かの沈黙がながれる。とても長い時間を感じる。

沈黙を破ったのは一条くんだった。

「俺も好きだよ。小野寺。」

「小野寺と一緒にだ。中学の頃からずっとずっと、好きだったんだ。」

え？一条くんは今なんて言ったんだろう。

私はついに幻聴を聞いてしまったのだろうか。

私の理解が追いつかないことを察したのか、一条くんはさらに続ける。

「何から話せばいいのか。さっき小野寺が言ってた、千棘への告白っていうのは誤解だよ。」

「さつきはさ、千棘に告白されてきたんだ。」

「それで俺、そいつを断つてきちまった。」

そんな。一条くんの言葉を聞いてまた私は固まった。

今日は動揺しっぱなしだな、私。

「どうして…?」

震える声で、ようやく口を開いた。

「言ったら、俺は小野寺が好きなんだ。ずっと前から。」

「でも、私は千棘ちゃんみたいにすごい才能もないし、素敵な女の子じゃないんだよ…?」

嬉しいくせに、なぜか否定してしまう。

多分もつと確かめたいんだ。彼の口から出る言葉を聞きたいんだ。

「今から最低なこと言うけどさ、俺ついこの間まで小野寺と千棘の両方を好きになっちまってたみたいなんだ。」

「人から言われるまで気づかなかったんだけどよ。」

「そんな時橘の結婚騒動があって、あいつのいつでも真剣に生きる様を見たら

自分の気持ちにも真剣に向き合って考えなきやいけないと思った。」

「その時気づいたんだ。確かに千棘といるときは楽しくて、腹の底から笑って。

あいつなら俺の知らない世界にも連れて行ってくれるかもしれない。いい。」

「でも。」

「俺はずっと、小野寺のそばにいたことが幸せだったんだ。小野寺と話して笑って、

この人と一緒にいられたらきつといつまでも幸せだろうなって。」

「小野寺は誰にでも優しくて、他人を幸せにできて、少しおつちよこちよいだけとそんなところも可愛くて、だからたまらなく好きなんだ。」

「それじゃダメか？」

あれ、どうしよう。涙が止まらないよ。

「ううん…！ダメじゃない。」

「嬉しいよ…。本当に、嬉しい…」

もっと可愛い声で返事をしたかったけど、涙でぐちゃぐちゃだ。そんな私につられてか、なぜか一条くんも泣いていた。

「どうして、一条くんが泣くの？」

「俺だって小野寺から好きって言ってもらえてすげえ嬉しいんだ。」

「ずっと両思いだったことに気づかないなんて、馬鹿だな俺たち。」

そう言つて泣きながら笑う一条くんを見て、私もようやく本当に笑った。

思えばお互いの気持ちに気づくチャンスはたくさんあった。本当に馬鹿だね、私たち。

しばらく2人で余韻に浸っていたら、今度はみんなの呼ぶ声が聞こえた。

「そろそろみんなのところに行かないとね。」

「おう、そうだな。めちやくちや怒られそうで怖えけど。」

「ふふ、しょうがないよ。一緒に怒られよう。」

勝手に舞い上がったり落ち込んだり、結局一条くんにもみんなにもたくさん迷惑かけちゃったな。あとで謝らないと。

そう思いながら一条くんと一緒に部屋の外に向かう。

「ねえ、ところでどうして千棘ちゃんの手を握ってたの?」

ふと思いついて聞いてみた。

「あ、あれはその…。いろいろあってあいつの気持ちにも真剣に答えてやらなきゃいけないと思ったから。」

「決して変な意味じゃないからな!」

「一条くんらしいね。」

やっぱり一条くんは誠実で優しい。

「あの、さ。ここから出るまでの間手を繋いでもいい、かな?」

我ながら少し大胆な台詞に、一条くんがドキツとしたのがわかった。

「あ、ああ!もちろんだ!」

「ほら、手出せ。」

「うん。」

そして私たちはみんなと再開する少し前まで手を繋いで2人で歩いた。

いつかのクリスマスの時とは違う、今度は恋人繋ぎで。

Fin

第一章 「コクハク」 ～アフターストーリー～

私宮本るりは自分でも珍しくソワソワしていた。

行方不明になってしまった千棘ちゃんの居場所を掴み、いつものメンバーと共に

小咲や千棘ちゃん、そして一条くんたちの思い出の場所である天狗高原に来たわけだが、

そこに漂う恋愛の空気に当てられてしまったのか。

舞子くんと一緒に行動していた時に彼に対しての想いを伝えてしまった。

つまり「告白」してしまったのだ。

つたく、自分自身この気持ちには最近気づいたばかりだって言うのに…

ちらりと横を歩く舞子くんの方を見ると、彼も彼で普段見せないような、

落ち着かない様子をしていた。

さつきは確かに初めて彼の意表をつけたのが面白かったわけだが。

「何よ、これじゃ調子出ないじゃない」

ぼそつと呟いてみる。

「あはは、確かに俺たちらしくないよね。」

私の呟きに反応して、舞子くんが苦笑いをする。

「まあ、こうなってしまったのは私のせいなわけだし。」

「それは素直に謝るわ。ごめんなさいね。」

「おやおやく??これが世に言う惚れた弱みってやつで…」

「ぐはあー」

「だまれ。」

ここぞとばかりににやついた顔でふざけたことを言う舞子くんのことを殴り倒す。

うん。やっぱりこっちの方が私たちらしい。

すっかり元の調子を取り戻したらうれしい私を見て、

舞子くんも安心したように笑った。

わかっている。

彼のこういうふざけているようで周りに気を遣っているところに惹かれてしまったんだ。

――――

天駒高原のふもとまで戻ってくると、つぐみちゃんと白いスーツを着た外国人の

男性が待っていた。

つぐみちゃんによれば、彼は千棘ちゃんの家 of 偉い方で、クロードさんというらしい。

つまりギヤングの幹部というわけで、

見た目と相まってなかなか怖い友人だし悪いようにはされないだろう。

「宮本様はお嬢のことを見ませんでしたか？」

「一条楽と小野寺様も探しにいつているはずなのですが連絡がつかなくって…」

「ごめんなさい。私たちもまだ会ってないわ。」

「そうですか…。うう、お嬢…！心配です。」

つぐみちゃんはいつでも千棘ちゃんのことを想っている。

私が小咲のことを想うのと同じように。

そう言うと千棘ちゃんは勢いよく頭を下げた。

私は突然のことに呆気にとられる。

「おおお嬢!?!頭を上げてくださいー!」

クロードさんはとにかく慌てていた。

少しして頭を上げた千棘ちゃんが口を開く。

「あのね、これから言うことはみんな落ち着いて聞いてほしいんだ。」

そう言うと千棘ちゃんは少し呼吸を整えて、苦笑いしながら続けた。

「私、楽にフラれちゃった。」

千棘ちゃんからの衝撃の告白があった後はとにかく大変だった。

もちろん私が驚いたっていうのもあるけれど。

何が大変だったかといえ、あのクロードさんだ。

とにかくすぐに一条くんを殺しにいつてしまいそうな勢いだったが、

つぐみちゃんの説得や、何より千棘ちゃん自身の制止によって一条くんが

この場で生を終えてしまうような心配はなくなった。

「私は確かに楽にフラれたんだけど、でもあいつは真剣に私の気持ちに向き合ってくれた。」

「だからいいの。」

「しかし…。やつはお嬢のことを悲しませて…。」

クロードさんはまだ納得がいてないみたいだ。

「あいつね、私がああの街にやってくる前からずっと好きだった子がいるの。」

「けどビーハイブがやってきて、私とニセモノの恋人関係が続けなきやいけなくなつて。」

「正直迷惑な話だと思う。私だってあいつのこと最初は嫌いだった。」

「でもしばらくたって、あいつの優しいところか頼りになるところもたくさん

見えてきて、気づいたら好きになつてたの。」

「けど樂はその間もずっとその子のことを想つてた。」

「フラれたのはすごく悲しかったし、いっぱい泣いちゃつた。」

「でも。」

「あいつも私のことを大切な存在だつて思うようになってくれて、

それを伝えてくれた。」

「だからもういいの。」

この千棘ちゃんの言葉を聞いて、野暮なことを言う人は誰もいなくなつた。

つぐみちゃんは胸に手を当ててずっと泣いている。

クロードさんは気持ちをどこにぶつければいいのかわからなくなつた様子だつた。

舞子くんは親友である一条くんの選択に思いを馳せているようだ。

そして私はどうと。

千棘ちゃんから目を離さずにはいられなかつた。

この時の千棘ちゃんからは悲しさだけじゃない何かを感じて、とても美しく思えた。

つぐみちゃんからお嬢とゆつくり話したい。という提案があり、クロードさんもそれについていった。そして私はまた舞子さんと2人になった。

「そっかー、楽は小野寺のことをね。」

「あら、あなたまだいたの。」

「ヒドイ！」

少し冷ややかな言葉を投げかけてみる。

「私も少し驚いたわ。小咲のことは応援していたけれど、

正直一条くんは千棘ちゃんを選ぶんじゃないかって考えもあったから。」

「キグウだねー、実は俺も。」

「あなたと同じ考えなんて虫唾が走るわね。」

「だからヒドイよ!?!」

「…冗談はさておき。」

私少しわからなくなってたの。」

「何がだい?」

「冗談だったのね…と呟いて舞子くんが聞き返してくる。」

「私はずっと小咲を応援してた。」

「今だって一条くんが小咲を選んでくれて本当に嬉しいわ。」

「なのに…」

「なのにな？」

「これでよかったのかって考えてしまうのよ。

千棘ちゃんのこととも好きになっちゃってしまってたから。」

私は今の心情を舞子くん伝えてみた。

「なるほどね、るりちゃんってかなり真面目だね。

かたいというかなんというか。」

私は舞子くんの顔の前に拳を突き出す。

彼はまあまあと言いながらまた話し始めた。

「俺は小野寺みたいにならずと一人を想い続けてきた恋も、桐崎さんみたいに途中から気持ちが変わった恋も、

どちらも同じように美しいものだと思ってる。」

「でも同じ人を好きになるってことは、

どちらかが悲しい思いをしなきゃいけないってことなんだ。」

「今日小野寺と桐崎さん、二つの想いがこの場所でぶつかり合った。

そして誰かが傷つくことになっても、楽は真剣に向き合った。」

「その結末がどうなろうと、誰にも何も言う資格はないよ。」

かっこつけすぎよ。

私は心の中でそう呟き、舞子くんの方を見る。

「確かにそうね。」

「ありがとう。話聞いてくれて。」

「あはは、今日はなんだかるりちゃんが素直すぎて怖くなってきたかも、なんて…」

「あら。だったらあなたにはいつも厳しくいった方がいいのかしらね…？」

「めめ、めっそうもごいません！」

「ったく、いつもいつも一言多いのよ。」

私の殺気に気づいたのかすぐさま態度を改める舞子くん。
本当に、一言多い男だ。

それからしばらくして、いつまでも戻ってこない小咲たちを心配した私と舞子くんは、

まだ話しているであろう千棘ちゃんたちを残して2人を探しに出発した。

途中でなぜかここにきていた万里花ちゃんと出会い、聞いたところによれば

小咲は千棘ちゃんと一条くんを追いつくために丘の上へ向ったらしい。

でも戻ってきてないということは、途中で何かあったのだろうか。心配だ。

不安を感じ、万里花ちゃんが小咲と会ったという屋敷の辺りまで急ぎ足で向かう。

「おーい、らくーい！おのでらーい！」

舞子くんがどこかにいるであろう2人に向かって呼びかける。
だが返事はない。

少しの間そんな状況が続いた。

「あの2人、大丈夫かな。るりちゃん。」

「大丈夫だと想いたいけれど、少し心配ね。」

「万里花ちゃんによればこのあたりで会ったみたいだし、

もっとよく探しましょう。」

しかし、不安はすぐに消えていった。

なぜなら2人でこちらに向かって歩いてくる一条くと小咲を見

つけたから。

こちらに気づくと手を振ってきたので、私も振り返した。2人ともどこか晴れやかな、嬉しそうな顔をしている。

あの様子を見たら2人がどうなったかはすぐにわかった。

「おめでとう。小咲。」

駆け寄ってきた親友の耳元で、小声で祝福をした。

すぐに真っ赤になる小咲。そういうところは変わらないみたいだ。

「さて、と。あなたたち心配かけてくれたわね。」

祝いたい気持ちはおおいにあるが、まずはお説教だ。

「ごめんなさい！」

まず小咲が謝った。

「私が1人でいて、一条くんは私のことを探してくれてたの。」

「だから私が悪いんだ。」

「いや！俺も携帯の電源切れちまって連絡しなかったしさ、

だからすまん。」

続いて一条くんも頭を下げた。まったくこの2人は。

「まあまあ、2人が無事に見つかったことだしみんなのところへ戻ろっか。」

舞子くんがフォローを入れる。

「そうね。聞きたいことは山ほどあるけど、まずは戻りましょう。」

こうして一条くんと小咲を見つけた私たちは、千棘ちゃんたちがいるふもとへと

戻ることにした。

「小咲ちゃん！」

私たちが戻ると、千棘ちゃんがまず声をあげた。

よく考えたらこの状況ってすっごく気まずいんじゃないだろうか。なんだか冷や汗が出てくる。

「千棘ちゃん！」

だけどそんな私の考えをよそに、小咲と千棘ちゃんはお互いに側へ寄ると抱き合った。

まるで何年かぶりの再会を果たした時のように。

そんな2人の様子を見て、一条くんも少し驚いているみたいだった。

きっと私と同じことを考えていたんだろう。

「千棘ちゃん、私、会いたかったよ……！」

「私も……！」

抱き合う2人の身体は、よく見れば震えている。さすがに不安もあつたんだろう。

でも、この2人を見ていたら不思議と安心した。

当然時間は必要だろう。今はまだぎこちない。でもいつか一切の溝がなくなつて、

また元どおりの関係に戻ることができる。そう確信させる何かがあつたから。

「一条楽。」

違う場所では、つぐみちゃんが一条くんに話しかけていた。

どうやらクロードさんはいないらしい。よかった。

「つぐみ、オレ……。」

「いいんだ！みなまで言うな。」

何かを言いかける一条くんをつぐみちゃんを止める。

「お嬢から話は聞いた。貴様もいろいろ悩んだ結果だったんだろう。」

「貴様が真剣に応えてくれたから、お嬢も納得している。」

「むしろ礼を言うよ。ありがとう一条楽。」

「ありがとう、か。」

「まさかそんなこと言ってもらえるなんて思わなかったな。」

一条くんが空を見上げながらそう返事をした。

「ふん、本来であればお嬢を悲しませたやつを許したくはないが…」

「私の知っている一条楽は、

なんの理由もなくお嬢を悲しませたりするような輩ではないからな。」

「貴様は貴様自身の幸せを選んだ。それだけのことだろう。」

「つぐみ…。ありがとう。」

一条くんがお礼を言う。

つぐみちゃんはだいぶ変わった。

出会った当初であれば、こんなことになれば一条くんは生きていないだろう。

つぐみちゃんが変わったのも、全部とは言わないが一条くんの力が大きいのもかもしれない。

そう考えるとすごい男だなとつくづく思う。鈍感クズ野郎だが。

「るりちゃん。」

考え事をしていたら不意に後ろから声をかけられた。

「小咲ちゃんと楽のこと見つけてきてくれてありがとうね。」

先ほどまで小咲と何やら話していたはずの千棘ちゃんだった。

横には小咲も一緒にいる。

「いいのよ。それよりもあなたタフなのね。驚いたわ。」

素直な感想を言ってしまった。ちよつと無神経だったかもしれない。

案の定、小咲は私の発言にあわあわとしている。

「そりゃ、私だって傷ついてるわよ。」

「でも小咲ちゃんも私の大切な友達で、私を探しにきてくれた。」

「それが嬉しい気持ちもあるもん。」

「そう。小咲もさぞも喜ぶでしょうね。ねえ小咲」

「もう、るりちゃん。」

「でもその通りかな、私もそう思ってもらえることが嬉しい。」

「私にとっても千棘ちゃんは、昔からずっと大切な友達だから。」

「小咲ちゃん…」

小咲の言葉が嬉しいのか、千棘ちゃんはまた小咲に抱きついてる。なんだかこの2人が付き合ってるみたいだ。

みなんで再会を喜んでいると、段々と空が白んできた。

どうやらもうすぐ朝のようだ。長かった1日がいよいよ終わる。

私たちは千棘ちゃんの家のお家用機で凡矢理へと帰ることになった。

万里花ちゃんは私たちの様子を見届けると、お付きの人と一緒にアメリカへ戻ると言って

旅立ってしまった。

帰りの道中、私は考え事をしていた。

舞子くんが言ったように、

確かに同じ人を好きになると言うことは誰かが傷つくことなのか
もしれない。

でも、それは同時に前に進むために必要なことでもあると思う。
いつかきつと、その傷は癒える時がくるだろう。

それに、これまでの全部がなかったことになるわけじゃない。

たくさんの思い出があれば大丈夫。

目の前で仲良さそうに並んで眠る千棘ちゃんと小咲を見て、私はそ
う思った。

今日あの場所で何人もの想いがぶつかった。

そのことを私は一生忘れられないだろう。

F i n

第二章 「コンヤク」 ―前編―

よく晴れた日の朝。

私は今日、思い出の場所である天駒高原に来ていた。季節は夏真っ盛りだが、標高が高いということもあって涼しい風が流れている。

ここにくるのはこれで3回目。

1度目は幼い頃、たくさんのかけがえのない友達ができた。そして忘れられない約束もした。

2度目はもう5年前になる。ここで多くの思いがぶつかって、結果的に私は長い間思い続けた人と結ばれることができた。

そして今日、私の隣にはその人がいる。

彼、一条楽くと幼い頃交わした約束を果たしにきた。

「あれからもう5年になるんだね。」

「ああ、そうだな。」

丘の頂上にある大きな岩に2人で腰掛けて、思い出話をする。

隣に座る楽くんは空を見上げている。きつとあの時のことを振り返っているんだろう。

「あの夜は本当に、いろんなことがあったよなあ。」

「うん。幼い頃にここで出会ったみんなが集まって、

10年以上前の約束も思い出も、全部が繋がった。」

「なんだかドラマみたいな話だよな。」

私もあの時のことを振り返る。うまく言葉にはできないけれど、楽くんの言うように本当にいろんなことがあった。

「ああ。俺たちのこともあるけど、まさか集のやつと宮本もあんなことがあるなんてな。」

「るりちゃんたちのことは後で知らされてすつごく驚いたよ…」

「今も仲良くやってるみたいだね。」

自分たちの知らないところでも意外な2人の中で恋が芽生えていた。

今は2人ともそれぞれの仕事をしながら一緒に生活しているらしい。

「他のみんなも、元気にしてるって。たまに連絡とるんだ。」

千棘ちゃんはファッションデザイナーになって、つぐみちゃんと一緒に世界中を飛び回っている。今じゃすっかり世界的な有名人だ。

万里花ちゃんはこれまでの花嫁修行の経験を生かして、いくつもの習い事事業をプロデュースしているらしい。なかなか独創的な内容で人気なんだとか。

「すげえやつらばっかりだったよな。俺たちも頑張らねえと。」

「負けてられないね。」

そうだ。私たちもみんなに負けないくらい頑張らないと。

私は高校を卒業してから専門学校に入り、今では妹の春と一緒に実家の和菓子屋を切り盛りしている。これでも料理の腕は上達していて、それは周りの人も認めてくれていた。

楽くんはというと、この春から念願の公務員として働いている。

結局実家は継がなかったみたいだけど、渋々二代目を継いだ竜さんと協力して凡矢理の治安を守っていく道を選んだ。たまに和菓子「おのでら」のメニュー開発を手伝ったりもしてくれている。

「小咲、そろそろ。」

しばらく思い出の空気に浸ってから、楽くんが切り出す。

「うん、そうだね。」

私たちは持ってきた鞄からペンダントと鍵を取り出した。

5年前のあの夜、私たちは約束の相手だとわかり結ばれたけれど、2人で話し合ってこのペンダントの鍵はまだ開けないことに決めた。

大きくなったら結婚しよう。そういう約束だったから。

「ザクシャインラブ」

私たちはお互いに見つめあつて約束の言葉を口にした。鍵を楽くんが持つペンダントに差し込む。

かちりと鍵がはまる感触がありペンダントの蓋が開くと、中から手作りの指輪と

それからお互いの名前が書かれた小さい紙が出てきた。

「わく、可愛い指輪だね。」

「はは、なんだか恥ずかしいな。」

幼い頃に作った指輪なんて確かに少し照れくさいけれど、当時から変わらない気持ち

改めて確認できたような気がしてすごく嬉しい。自然と顔が緩んでしまう。

楽くんも口元を綻ばせている。私たちきつと同じ気持ちだよね。

「こっちも見てみるか。」

楽くんがそう言って小さい紙を取り出す。
折り畳まれたその紙を開くと、どうやらそれは手紙のようだった。
まず一つ目は楽くんからの手紙。

「大きくなった小咲へ、か。」

「…これ俺が読むのか？」

「そうだねえ、せっかくだし…」

「わかった。じゃあ読むぞ。」

私たちはお互いに小さい頃書いた手紙を読み合うことになった。

「改めて、大きくなった小咲へ。」

「お元気ですか。僕は多分元気です。」

「ふふ、可愛い。」

「おい、恥ずかしいからやめてくれて。」

子どもらしい書き出しに、私は思わず反応してしまう。

「あー、続き読むからな。」

「大きくなって結婚したら、いっぱい好きな動物を飼おうな。」

「指輪も本物のものを買ってあげます。」

「結婚したら小咲の料理を毎日食べたいです。」

「つて、これは大丈夫なのか。小さい頃の俺。」

「ちよつと、楽くんひどいよ?!」

さっきのお返しと言わんばかりに今度は楽くんがつつこみを入れる。

「はは、わりーわりー。今は上手くなったもんな。」

「ちゃんと勉強したもん。楽くんほど上手じゃないかもしれないけど。」

少し意地悪な楽くんには私はふくれた顔をしてそう答える。

「今は心から毎日食べたいと思ってるよ。」

「っと、俺からの手紙はこれで終わりみたいだ。」

「我ながら可愛い手紙だったなこれは。」

「ほんとに、可愛かった。」

「けど嬉しかったよ。」

「はは、小咲がそう言ってくれるなら昔の俺も喜ぶだろうな。」

「もちろん今の俺も。」

「なあ、早く小咲の手紙も読んでくれ。」

早く自分の番をを終わらせたいのか、楽くんに急かされる。

次は私からの手紙を読む番だ。

「う、うん。じゃあ読みます。」

自然と改まった口調になる。自分が読む方になるとやっぱり緊張するな。

「えっと、大きくなった楽くんへ。」

「大人になった楽くんはきつととっても背が高くなってらんだらうね。」

「早く大きくなって会いたいです。会ってたくさんお話がしたいです。」

「きつとまた会えると信じています。」

「なんか小咲は子供の頃から大人びてんな。」

「そ、そうかな。」

「ああ。余裕があるっていうかさ。」

楽くんとの会話をよそに私は動揺していた。その後には書かれていた内容が原因だ。

「小咲?。」

「え?。」

「続き、読んでくれ。」

少しの間かたまってしまったようだった。
楽くんと呼ばれて我にかえった私は、一度深呼吸をして続きを読み始める。

「とつても時間がたつてると思うけど、

私はずっと楽くんのが好きだと思います。」

「楽くんは、いまも私のことを好きですか？」

「す、好きでいてくれたら嬉しいな。」

恥ずかしくて顔が熱い。

楽くんはどう思っているだろう。

そう思っておおそるおそる彼の方を見ると、楽くんと目が合った。

「ああ。好きだよ。」

楽くんは微笑んでそう言った。

そして隣に座る私の手に自分の手を重ねる。

私は突然のことに心拍数が一気に上がった。

「小さい頃も、学生の時も、そして今もずっと好きだ。」

「それに、小咲といるといつも幸せなんだ。」

「だから小咲、俺と結婚して欲しい。」

不意打ちのようなプロポーズに、心臓はもう爆発寸前だ。

急に男の子らしくするのはずるいよ…

「本当に、私でいいんだよね…？」

わかっている。こんなことを言うのは野暮だ。

今日はそのつもりでここにきたんだから。

「ああ。小咲がいいんだ。」

でも、彼のこの一言を聞きたかった自分がいた。

「小咲の方こそ、俺なんかでいいのかよ…？」

楽くんもそう聞き返す。

少ししたら胸のドキドキもおさまってきた。

「なんかじゃないよ。」

「私も、楽くんがいいです。」

お互いの意思を確認した私たちは、今のやりとりを照れくさく思ったように笑い合った。

「後悔すんなよ。」

「するわけない。」

私は真剣に、楽くんの目を見てそう答える。

「小咲。」

不意に私の背中に楽くんの手がまわり、2人の顔が近づいてゆく。

「あ…」

私はこれから起こることを予感して、ゆっくりと目を閉じた。

数秒の後、お互いの唇が触れ合う。

不思議とさつきまでの恥ずかしい気持ちはなくなっていた。

今はただ、この温もりをずっと感じていたい。そう思った。